とうきょう　すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0316
施設名	かすみ台第一保育園
施設所在地	東京都青梅市大門2-253
法人名	社会福祉法人かすみ福祉会

1.活動のテーマ

〈テーマ〉

米（５歳児クラス）

〈テーマの設定理由〉

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

・普段食事をしている米がどのように育っているのか、米を育てることの大変さを学び、改めて食への感謝を抱いて欲しいという思いから、活動として取り入れた。

2.活動スケジュール

・６月上旬、バケツを使った稲植えを行う。地域との交流を目的とし、JA西東京の職員と一緒に取り組んだ。
・６月中旬より、月に２回交代制で米とぎを体験し、炊飯器で炊いたご飯を給食で食べる。
・７月、８月は経過観察を行う。交代制で水やりや葉の長さを測定し、観察画として記録を残す「稲の観察記録」の活動を実施した。
・８月下旬、鳥対策として布や新聞紙等を使ってカカシ作りを始める。全員分をバケツの稲の側に飾った。
・９月は引き続き経過観察を行う。
・１０月上旬、稲刈りを行う。６月に交流を図ったJA西東京の職員と再び一緒に取り組んだ。
・１０月中旬以降、牛乳パックを使った脱穀やすり鉢を使ったもみ取りなどを体験する。
・１１月上旬、白米にした米を使っておにぎりを食べる。「おにぎりパーティ」と題して
　おやつで食べた。
・１１月下旬以降、収穫時に出た藁を使ってしめ飾り作りを始める。完成した作品を廊下に装飾し
年末年始前にご家庭へ配布した。
またJA西東京かすみ直売センターまで行き、交流を図ったJA西東京の職員へしめ飾りを贈った。

3.活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

・稲植え用バケツ　・稲用の土　・米用の苗　・４５㎝定規　・水やり用のホース　・画用紙　・クレヨン　・稲　・米
・米とぎ用ザル　・米とぎ用ボウル　・炊飯器　・カカシ用の布や割り箸　・牛乳パック　・軟式ボール　・すり鉢　・牛乳瓶　・脱穀用のバチ　・スズランテープ　・松ぼっくり　・ドライフラワー　・水引　・ワイヤー・半紙　・和柄、金の折り紙
・麻紐　・ボンド

4.探求活動の実践

〈活動の内容〉

・米に関連する絵本や図鑑を常に見れるよう絵本コーナーに設置し、カカシの設置や収穫時期などに応じて読み聞かせを行った。
・夏季期間は、稲や葉の生長を観察しながら45㎝定規で測定したり絵を描き、廊下に掲示して保護者に周知した。
・米とぎの日にはブランド名を紹介し、日本地図や地球儀、iPadを使用して生産地について調べた。
・カカシ作りでは、シーツの切れ端や割り箸を使用し、自分たちが思う鳥退治方法をイラストで表現した。
・脱穀やもみすりなどを通して昔の方法で疑似体験を行い、子どもたちで玄米にした。最終的に保育園周辺の無人精米機を利用して白米にし、手作業の大変さを実感したりおにぎりパーティ開催への期待を膨らませた。
・完成した締め飾りをJA西東京の職員へ届けることで、更なる交流を図った。

〈活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関り〉

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

・毎月米とぎをしていることで炊き立てご飯を食べることへの期待が増し、普段以上におかわりが人気であった。また自分が研いだ米を食べることで、特別感を抱いた様子であった。給食時には米とぎをしてくれた子に対して「美味しいね！米研いでくれて、ありがとう」と感謝を伝える声が聞こえ、微笑ましいやりとりであった。米とぎに使用した産地について日本地図を使用しながら調べることで都道府県にも興味を抱いていた。「ぼくの知っている宮城県！」「この間、秋田県行ってきたよ！」という声を機に「自分たちが住んでいる場所からどの位離れているのか調べてみよう！」と、保育者と一緒に話が膨らむことができた。
・もみすりや精米、脱穀の手作業は玄米になるまで約1カ月かけて行ったこともあり、「手が疲れるね」「頑張っているけど、食べられる米ってこれだけ？えぇー！」等、子ども達なりに苦労を感じた声が挙がっていた。今回の体験を通して昔の人や現代の様子を比較することができ、改めて食への感謝を感じられた様子であった。
・稲の苗植えや収穫、締め飾りの贈呈などJA西東京の職員と再会するたび子ども達は交流できることを喜んでいた。休日に家族と出かけた先で、JA西東京の職員を見かけたことを嬉しそうに知らせてくれる子もいる程であり、地域との交流として貴重な体験ができた。

5.振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

・子ども達と一緒に水やりや観察、米とぎをしたことで、米に対しての興味が持続していた。米とぎの経験を通して、自分が研いだ米はいつも以上に美味しさを感じたようで、おかわりをする子が多かった。また自然と子ども達の間で「研いでくれてありがとう。美味しいよ！」という会話が生まれ、思いやりの心をはじめ米や食事に対しての意識が高まっていることに嬉しさを感じた。
・JA西東京の職員との交流を図ったことで、お互いに良い印象を持てた。年末に合わせて手作り締め飾りを贈呈することを計画すると子ども達も賛同していた。締め飾りと一緒にメッセージを贈りたいことながら案内してくれたため、子ども達はより楽しむことができた。店内にいた従業員や客とも交流を図ることができ、貴重な経験となった。